信頼の教育

河野　伊一郎
（独立行政法人国立高等専門学校機構理事長）

一　国は人なり、人は国なり

世の中が変わるとき、国の変革期には教育問題が社会の関心事になるといわれている。これは、古今東西を問わずみられる現象だそうである。「国は人なり、人は国なり」ということからすれば、教育はその人をつくる行為であるから、納得できるところである。

近代日本での大変革期といえば、第一には明治維新であり、第二には第二次世界大戦後である。そして今が第三の変革期であるといわれている。あるいは変わらなければならない時期であるということであろう。

明治維新は封建社会から近代社会への大変革であり、教育面では全ての国民が最低限の学校教育を受けられるようになり、教育問題が社会の関心事となったことは当然である。この新しい教育制度は日本の隅々にまで徹底され、日本の国力を急激に増強させた原動力となったことは事実である。また、第二次世界大戦後はＧＨＱの強力な指導のもとに当時の軍国主義から民主主義へ転換したことにより、新しい教育体制へと移行し、能力

と意欲があるものは高等教育へ進むことができるという夢を持てる状況が現れた。日本の戦後復興とその後の高度成長はこれらの教育に支えられたことも事実である。

さて、今グローバル化等の大変化の中で、第三の変革期となりうるのか。確かに今、教育問題は社会の関心事となっている。新聞をはじめジャーナル等で、教育問題が連日取り上げられている。日本が順調に高度成長を遂げていた二〇年、三〇年前には、教育問題がマスコミに取り上げられることは極めて少なかったことを思えば、今日本を変革しなければならないと考えている人は多く、したがって教育問題に対する関心が高まっているという見方もできるかもしれない。

いろいろな評価や報道がなされているが、私が特に関心を持つ事柄から一、二を述べてみたい。その一つに、最近のことであるが、日本の子供達の学力順位が先進諸国の中で著しく低下していることが大きく取り上げられた。ランク付けに興味のある人にとっては格好の関心事である。少し短絡的な言い方になるが、それは「ゆとり教育」のせいであり、このままではいけないので、従前の授業時間数に戻す必要があるとした。こうした議論や検討は勿論必要であるが、教育問題を安易に単純化して結論を導こうとするのは如何なものかと感ずる。私個人としては、若者達の勉学意欲を取り戻し、さらに高めるにはどうすべきかを議論し研究することの方が喫緊の課題として重要であると考えている。しかし、この課題は、狭い学校教育という範疇の議論ではなくもっと広い問題視野が必要であることは当然であろう。

もう一つ、高等教育、特に大学等の運営については、競争原理の導入を中心にもっと企業的センスの導入が必要であるとか云々の議論がある。そして大学の法人化後のその評価が急激にあるいは過激に取り扱われるようになってきている。これも誤解を招きやすい議論になることがある。企業は基本的にはものづくり行為であり、それを通して社会に貢献するのであるが、併せて利益を上げることを目指す。「よいものを、早く、安く作る」ことに努力するのは当然である。一方、教育は人づくり行為である。人に希望と意欲を与え、自ら成長するエネルギーを与えることを第一義としている。その成果を短期間で判定し、しかも数値で表すことにはなじみに

くい仕事である。こうした本質的なところを十分に考慮した対応をしないと進むべき方向を誤らせる危険性が高い。

二　信頼の教育

私の幼なじみで、小中学校の教員を務めたグループが時々集まって懇談することがあり、それに私も参加している。校長で退職した一人の友人が「ほとほと疲れた、何で疲れたかといえば保護者対応で疲れた」というのである。あるとき子供の保護者が学校へやってきて、「うちの子供は近頃、朝起きてきて、おはよう、の挨拶もしなくなってきた。いったい学校ではどういう教育をしているのか」笑い話になるようなことが現実に起きているのである。一事が万事というのである。

上記したように、教育は人づくり行為である。学校教育は勿論のこと、家庭教育、社会における教育もまたそれに劣らず重要である。学校教育はいうまでもなく、「知」を中軸とした教育であるはずである。家庭教育は「しつけ」、社会教育は「生き方」を中心とする。マスコミなど（国民の代弁者という人もいるようだが、果たしてそうか？）は学校教育のみを取り上げて、教育が不十分で悪いのは学校のせいであるという論調が強すぎるように思えてならない。学校教育をどうするのかが課題の中心であることに異論はないが、それを論ずるにあたって、もっと広い視野で教育の本質の議論が併せて行われなければならないことを感じている。

私が今最も関心を持ち、問題視していることは「信頼の教育」の衰退である。教育の場においては、教える者と学ぶ者がいる。学校教育においては教えるものは教員であり、学ぶ者は生徒、学生である。家庭教育においては、親と子、社会教育においては先輩（上司）と後輩（部下）である。その教える者と学ぶ者の間の信頼の低下が最重要課題の一つであると考えている。

四五年前、私が大学の教員になるよう大学から勧められたときに、京都の尊敬する先輩にお話を伺ったことがある。教育者として自分がやってゆけるのか確信が持てなかったからでもある。その折、いろいろお話をし

ていただいたと思うが、その中で〝教育は人づくりである。教える者と学ぶ者の信頼の上にこそ教育は成り立つ……〟という話があり、それが忘れられず、そのことを時々思い出し、確認しながら長い教員生活を送ってきた。

今、親と子、教員と学生、上司と部下の信頼関係が揺らいでいるという意見に同調される人は多いと思う。この信頼の低下が（少し論調に飛躍はあるが）子供たちの勉学意欲（仕方なくやるのではなく自分の意志でやる）を低減させているという意見に賛成である。

〔私の教育信仰―吉田松陰〕

私が大学の教員になることが内定した頃に、萩の松下村塾を訪れたことがある。吉田松陰はどういう人物であり、どういう教育をしていたのかなどに関心があったからでもある。それまでは、吉田松陰とは明治維新の思想家、教育者であり、維新で活躍をした多くの若者に強い影響を与えた人物という程度の認識であった。ここを訪問して多くの発見があり、驚きがあったことを思い出す。松陰がこの松下村塾で講義をしたのはわずか約一年半という短期間であり、安政の大獄で二九才の若さでこの世を去っている。松下村塾の建物なども想像していたようなものでなく簡素な佇まいであり、教えていた部屋も狭い。このようなところで、しかも短期間の教授で、どのようにして明治維新を動かした優秀な若者を数多く育て影響を与えたのかが私の最大の関心事である。

彼は処刑を前に、二つの辞世の句を残している。一つは、彼の友人（弟子たち）に宛てたものであり、「身はたとい武蔵の野辺に朽ちぬとも　留置かまし大和魂」、他の一つは「親思うこころに勝る親こころ　けふのおとづれなんと聞くらん」。前者の句からは、彼のほとばしるような使命感、情熱が伝わってくる。後者からは、彼のやさしい、深い思いやりの心を感じ取ることができる。

彼は自分の使命に対する強い情熱と隣人に対する深い思いやりの心を兼ね備えていたように感じる。私は教育者たるもの、この「強い使命感と隣人に対する深い思いやり」が不可欠なのであると信ずるようになった。

学ぶ者は教える者の言葉からだけでなく、その心を視て学ぶものであり、それが「信頼の教育」であると考えている。私はそれ以上、吉田松陰については知らないが、それで充分だと思っている。私にとって吉田松陰は教育信仰の対象なのだから。

三　国立高等専門学校の教育

私は四〇年余大学で教員を務め、その後、国立高等専門学校機構に移って四年目になる。誠に失礼ながら、ここに移るまで高等教育機関である高等専門学校（高専）を特別意識したことはなかった。しかし、ここに着任して、高専における教育の特徴、個性に心底驚愕したことが実感である。まず二、三のエピソードを紹介しよう。

国立高専機構理事長に着任した直後、当時の文部科学大臣が長野工業高等専門学校を視察されるという連絡があり私も同行した。私にとってそれが最初の高専視察であった。一通り視察した後、会議室に集まって懇談したとき、文部科学大臣の第一声は「今どきこんなすばらしい若者がいるとは驚きである。高専がいかにすばらしい教育を行っているかよくわかった。……」というものであった。若干、お世辞があったかも知れないが私も同感であったので鮮明に覚えている。校庭や校舎で会う学生たちは、私たちに対しても〝こんにちは〟〝さようなら〟とはっきりと挨拶をする。そうした学生たちの表情、目の輝き等から、やれといわれてやっているのではないことがわかる。それまで大学で味わったことのないすがすがしい雰囲気であった。勉学する場でこのように生き生きとした若者に会うことの感激のようなものを味わったのである。では、如何にしてそういうことになり得たのか。一つは、中学卒業の一五才という若い年代から「創造力のある実践的な技術者」になるんだという目的意識をしっかり持って勉学していること。有力大学に入るための偏差値上昇のための勉強や過酷な受験技術の勉強はなく、また、高専の教育寮における共同生活体験等々、そして何よりも教える教員と勉強する学生（あるいは先輩、後輩）の信頼関係がしっかりしていることが最大の根源であると考えている。そこ

には高専教員の並々ならぬ教育への情熱が感じられる。

それからしばらくして今度はOECD（経済協力開発機構）の高等教育調査団が来日し、いくつかの大学と高専を視察することになった。国立高専機構としては、五五国立高専の代表として松江工業高等専門学校を視察してもらうことにした。同調査団はいくつかの大学と高専を視察した後、文部科学省で高等教育関係者と懇談をした。その中で「日本の高専は、すばらしい高等教育機関であると思う。他の先進国も見習うべきことが多い。特に教員の教育に対する情熱、学生の勉学意欲は賞賛に値する……」という話があった。このことは日本の高等教育関係者の間で話題となったことがある。

もう一つ、産業界等における高専の評価と期待についてお話しておきたい。

現在、高専卒業生に対する求人倍率は二〇～三〇倍、専攻科修了生については三〇～四〇倍となっている。就職が難しいといわれた時期でさえ一〇倍を超えていたと聞いている。その原因はいろいろある。高専の卒業生は年約一万名である。大学の工学系学部等の卒業生の十数分の一である。一方、企業が必要としている技術者は、理論に強い大学の工学系学部等の卒業生より実技に強い高専卒業の実践的技術者のほうが圧倒的に多いのである。こうした実情から高専の拡大の論議や要求が出ているのは当然であるが、事はそう簡単ではない。これについて詳しく述べる余裕はないが、一つは財政問題であり、他の一つは高専に対する一般国民の認知度（その特徴や実態を知らない人が多い）の低さである。これらについては、これからの国立高専機構が努力すべき課題であると認識している。

ある企業のオピニオンリーダーの一人が次のような話をしておられたことが印象に残っている。「技術者にこんなものを作ってほしいと依頼すると、大学卒の人は文献調査から始める。一方、高専卒の技術者は、材料を集めて試作品作りから始める」大学の工学系学部で本来行うべきは工学教育であり、高専のそれは技術者教育なのである。その一端がこれに現れている。

高専の卒業生に対する求人は企業のみではない。有力な大学からの三年次編入あるいは大学院進学（専攻課修了生）の期待が高まっている。その理由は、種々あろうが、高専の卒業生が優秀であるということの他に、

大学に高専からの卒業生や修了生が入ると全体の勉学意欲が増進されるようだということである。大学の学生の中にも目的意識を持って勉学に励む者は当然いるが、比率からいえば高専生の勉学意欲はそれを上回るということも聞く。このぐらいの年令になると、頭の良し悪しよりも意欲の強弱のほうがその成長をより支配するものとなるという見方に賛成である。

平成一六年に国立高専も独立行政法人となった。国立大学を含め全ての独立行政法人は、それ以前の規模や組織のままで法人化された。一方、国立高専は、全国の国立高専五五校が一つの法人にまとまり、全国にネットワークを持つ最大規模の高等教育機関となった。国立高専機構はそうしたスケールメリットを生かしながら、教育の質の向上を中心に着実に前進すべく努力しているところである。